

公表

事業所における自己評価総括表

| | | | |
|----------------|------------|----|-------------|
| ○事業所名 | あいうえおん みらい | | |
| ○保護者評価実施期間 | 2025年1月17日 | | ～ 2025年2月7日 |
| ○保護者評価有効回答数 | (対象者数) | 1名 | (回答者数) 1名 |
| ○従業者評価実施期間 | 2025年1月17日 | | ～ 2025年2月7日 |
| ○従業者評価有効回答数 | (対象者数) | 3名 | (回答者数) 3名 |
| ○訪問先施設評価実施期間 | 2025年1月17日 | | ～ 2025年2月7日 |
| ○訪問先施設評価有効回答数 | (対象者数) | 1名 | (回答者数) 1名 |
| ○事業者向け自己評価表作成日 | 2025年3月7日 | | |

○ 分析結果

| | 事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること | 工夫していることや意識的に行っている取組等 | さらに充実を図るための取組等 |
|---|--|--|--|
| 1 | 個別支援の充実 子ども一人ひとりの特性やニーズに応じた支援を提供する強みがある。 さらに、保護者や保育所と連携しながら、支援計画をより細かくカスタマイズすることができる。 | 保護者や保育士と綿密に面談し、子どもの得意なこと・苦手なことを把握する。 実際の集団生活の様子を観察し、支援が必要な場面やタイミングを具体的に把握する。 | 専門職との多職種連携の強化：作業療法士・言語聴覚士・臨床心理士と連携し、より専門的な視点で支援計画を作成。 |
| 2 | 保育所・幼稚園・学校との連携強化 訪問支援を通じて、受け入れ先の施設と専門的な知見を共有できる点が強みである。 さらに、定期的なケース会議や研修を実施し、支援の質を向上させる。 | 子どもの状況や課題、成長の変化を共有し、支援方法を見直す。 事前に保育士や担任から具体的な困りごとを聞き取り、会議で具体的な支援策を検討できるように準備する。 | 「現状確認→課題整理→支援の調整→次回までのアクションプラン決定」の流れを作る。 |
| 3 | 保護者支援の充実 保護者への相談支援や情報提供を行うことで、家庭と保育所が一貫した対応を取れる点が強みである。 | 保護者の意向を尊重しながら、施設と共に一貫した対応が取れるようにする。 保育所等のそれぞれの特徴を理解し、支援内容を柔軟に調整する。 | 保護者が日常生活の中で取り組める支援策を具体的に提案。保護者が日常生活の中で取り組める支援策を具体的に提案。 例：「朝の準備をスムーズにするための視覚支援」「兄弟姉妹との関わり方」など。 |

| | 事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること | 事業所として考えている課題の要因等 | 改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等 |
|---|--|--|--|
| 1 | 支援員の数が不足しており、ニーズの高い地域では十分な支援が提供できない。 | 言語聴覚士(ST)・作業療法士(OT)・臨床心理士などの専門職が少なく、多様な支援ニーズに対応しきれない。 支援員のスキルや経験にばらつきがあり、質の高い支援を継続することが難しい。 | 人材確保のための積極的な採用活動(研修制度の充実、待遇の改善、働きやすい環境づくり)。 他の支援機関や専門職との連携強化(必要に応じて外部専門家を招き、支援の幅を広げる)。 |
| 2 | 施設側が訪問支援の役割や目的を十分に理解していない場合があり、連携がスムーズにいかない。 | 保育士や教員の負担を考慮しつつ、適切な支援方法を伝えるのが難しい。 支援が一時的なものになりやすく、継続的な連携が取れないケースがある。 | 保育所・学校向けに「訪問支援の役割」をわかりやすく説明する資料を作成し、周知を徹底する。 |
| 3 | 家庭での支援が十分に行われず、訪問支援の効果が限定的になってしまう。 | 保護者との情報共有の方法が統一されておらず、支援の方向性がずれることがある。 | 家庭でも取り組める簡単な支援プログラム(例：視覚支援の活用、日常生活のルール作り)を提供する。 支援状況を定期的にフィードバックし、保護者と連携しながら進める仕組みを整える。 |